

・みかんの本文庫「りゅうになりたかったへび」

とにかく、舞台をうまく使えていたようにおもいます。これは、アフタートークから推察するに、アシスト制度がうまくいっていたのかなあ、と思えるほどに効果的な扱い方でした。そういった、あらゆることが積み重なっていて、最後の龍が飛ぶシーンはダイナミックで効果的でした。

気になったのは、物語中でおばあさんを泣き止ませるために「好きなものが3つまで出てくる箱」を龍が渡すのですが、「泣き止ませるため」だけに出て来たように感じました。あれは、やはり「おじいさんが食われて死ぬ」ことを〈受け入れるのが嫌なおばあさん〉に「好きなものがでてくる箱」を渡しおばあさんがケロッと箱を受け取るのが面白いシーンだと思います。そのやりとりが弱いように感じました。具体的に書くと、おじいさんが家に帰って、一目おばあさんに会って、蛇の元へ戻るというくだりが少しだけ短かったように思います。

「一目会う」という字の如く「一目」だけだったので、あつという間だったというか。あつという間に、家を出るにしろ、あそこで、おじいさんの後ろ髪引かれても、それを振り切って、蛇の元へ行き覚悟を決めるというのがもう少し印象強くあってもよかったですのではと思っています。〈死への覚悟〉〈決別への覚悟〉をもう少し匂わす演出があったかと思っています。そこがあると、蛇が仕方なくおばあさんに「好きなものが出てくる箱」でおばあさんがケロッと笑顔になるのが更に面白くなったかと思っています。こういったことを違和感なく、やるためには、お芝居の中にある行間の葛藤を読み解き、印象強く演出していけば、物語がより見えて来たようにも思います。

音楽もこの舞台にはとても欠かせない要素でした。シンセサイザー一台で「割り切って」、音楽も効果音も鳴らすという手法は個人的にも好感を持つことができました。あらゆる古今東西の CD を使って豪勢にすることよりも「シンセ一台で割り切って」ということのほうが「一つの時間」を描くには、ふさわしいように思います。その中で、「不協和音」と「和音」がキャラクターの心情に合わせて、演奏されているのが心情を読み取りやすく良かったです。俳優さんの楽しそうな姿や、音楽、アシスト制度を素直に受け入れた姿勢など、すべてにおいて、効果的で、上演に対する純粋な気持ちを汲み取り感じ取ることができエンターテイメントされていたので、楽しませていただきました。

村上慎太郎